

REPORT

08.5.17 渡辺満久講演

活断層の専門家の驚きと憤り 活断層のごまかしと値切りの実態を告発

渡辺満久・東洋大教授、中田高・広島工業大教授、鈴木康弘・名古屋大教授は“時の人”である。この間、電力会社の活断層評価が間違っていることを次々と暴き出した“必殺仕事人”だ。

渡辺さんが日本原電が敦賀原発の真横を横切る浦底断層を“意図的”に隠したことを暴き出したのが今年1月末。電力会社は3月末の「耐震バックチェック」報告で一転、浦底断層を「考慮すべき活断層」と認めた。渡辺さん、鈴木さんは4月27日、原子力政策「転換」議員懇談会の浦底断層視察に同行、現地を確認。この後、渡辺さんは六ヶ所再処理工場の敷地周辺の活断層評価で重大な見落としがあることを指摘、浦底断層問題とあわせて、日本地球惑星科学連合の大会(5月25日～)で発表。

敦賀半島は活断層だらけ 原発の真横・真下にも!! 活断層評価のごまかしと値切りの実態」と単刀直入に銘打って、5月17日に渡辺さんの講演会を守口市で行った。私は反原発ではありません。しかし、こんなにひどい実態を次々と見てしまっ、これは大変だと思いました。」渡辺さんにこう言わしめた“実態”の一端を以下、報告したい。主催は“とめよう「もんじゅ」関西連絡会&脱原発政策実現全国ネットワーク関西ブロック”である。(大島茂士朗)

■「犯罪的」な浦底断層隠し

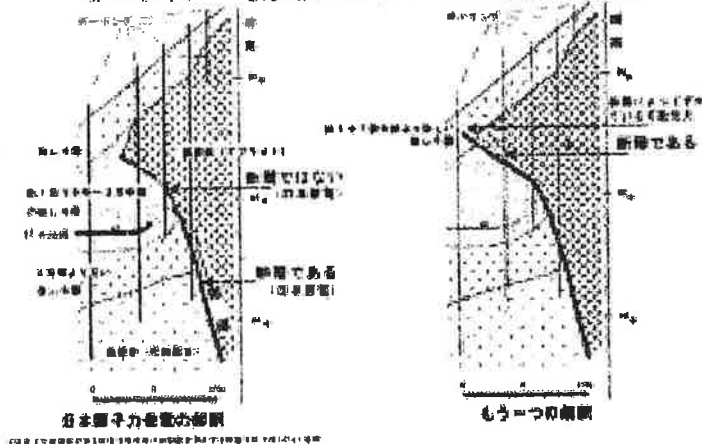
日本原電が敦賀3、4号増設の申請で示した資料を見て、「これは何だ!」と驚いたと渡辺さんは言う。「一目見て分かった」という、専門家から見れば子ども騙しの稚拙な手口。

浦底断層が旧指針で決められた「5万年前」より古いことにしたかったらしい。日本原電は、誰が見ても「約1万5千年から3万年前」の地層を切っている図を示してこう解釈した。「5万年前以前に動いた断層がオーバーハング

したままじっとしていた。そこに1万5千年～3万年前の地層が堆積した。」かくして浦底断層は5万年前より古い時代の活断層で評価対象にはならないとして無視された。しかし、ボーリングとボーリングの間は推測にすぎない。

渡辺さん、中田高さんらは明らかに1万5千年前からの地層を切っていると判断した上

図1：日本原電が行った浦底断層のごまかしの手口
どのようにでも解釈できるボーリング調査結果



再調査によって、「もう一つの解釈」と同じ結果が報告されると予想する

地質・地盤に関する安全審査の手引き検討委員 第3回(08.2.27)
参考資料第一号 変動地形学的調査とリニアメント調査」中田高委員

で、図1の右側のように示した。浦底断層は最も新しい地層(4千7百年前～)を切っているのでは?と。保安院の指示でトレンチ調査が実施され、結果、渡辺・中田予言は的中した(図2)。

視察現場で渡辺さんと日本原電の担当者で繰り返しやりとりがあった。

「だから当時の判断は間違っていたんでしょ」

「いえ、間違っていたとは考えていません」

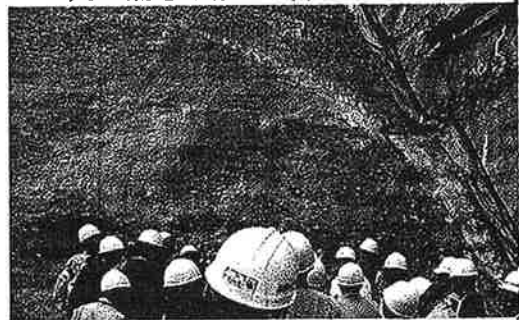
当時の判断も正しかった。今の判断も正しい。こんなバカな話はない。渡辺さんは「指針の改訂や新たな調査で分かったことではない」「責任を明確にしていけない以上、新たな調査結果も信用できない」と吐き捨てた。

■分岐断層が全く考慮されていない

浦底断層は横ずれ断層。東南の柳ヶ瀬山断層—ウツロギ峠断層側では北東側が低く、南西側が隆起している。ところが浦底断層では逆に北東側が隆起して南西側は低い(図3)。これを理由に原電は連続性を否定しているが、渡辺さんは「末端部の地盤が固いと堰止められる形でこういうことが起こる。珍しい事ではない」という。更に「末端部では分岐断層が現れる可能性がある」と指摘する。兵庫の地震の野島断層の南西末端部にも分岐断層が現れている(図4円)。

分岐断層が原発建屋側に現れるときにどのような揺れになるのか、地盤がずれたり傾く事は十分あり得る。しかし全く想定されていない。

図2 浦底断層(矢印)トレンチ現場



※図1との比較のため左右を反転処理

図3 横ずれする浦底断層 隆起が逆転



図4 野島断層の分岐断層
1995年兵庫県南部地震

08.5.17 渡辺満久さんの講演を聴いて

奈良脱原発ネットワーク 堀田美恵子

四川巨大地震に続いて、岩手・宮城内陸地震が起こり、これから、どこでどんな地震がおこるのだろうと思うと不安です。

想定マグニチュード、耐震設計など信じていていいものか、原発の存在そのものに警告が発せられているに違いないと感じています。

さて5月17日の講演の題ですが『ごまかし』と『値切り』の実態』とは、ずいぶん挑戦的な演題です。渡辺先生の「腹にすえかねて・・・」という言葉に、電力会

社や国の審査機関とのやりとりでのジレンマが感じられました。

こんなに、頻繁にあちこちで、大きな地震が起こると、身近な所の活断層がどこにあるかと言うことが日常でも話題になります。ところが、どのような人が、どうやって評価しているのかなど考えたことがありませんでした。今回の講演会で、初めて活断層を研究しているのは、「変動地形学」の研究者だと知りました。過去の地震によってどのような起伏が起こってきたか、地面

の起伏を見て、その活断層がいつごろ動くのか、動いてどのような起伏になるかということの研究しているのだそうです。

ここでようやく、私の頭の中で「原発震災」の著者の石橋克彦さん(地震学)が朝日新聞に投稿されていた「活断層とは、航空写真から読み解く変動地形学の手法が調査の基本となる。原発の耐震設計は敷地に大きな影響を与える地震を適切に想定し、それによる地震動を正確に予測する事が基本であるから、絶対に活断層を見落としはならない」と、言われていたことに繋がる講演会だったことがわかりました。

しかし活断層があるか、ないかということ判断する専門家は日本に20名もいないそうです。

渡辺さんは、原発敷地内の活断層評価には、多少の「ごまかし」はあるかもしれないと思っていたが、予想をはるかに越える「ごまかし」と「値切り」行われていたと言います。

2006年に取り組んだ島根原発付近の活断層は短く評価されていることがわかったそうです。そこから不安が広がり、原発周辺の活断層を見直したい衝動に駆られたとのこと。その時から、どうして電力会社の評価と地形変動学から導いた評価が違うのかを追及していったそうです。

そしてわかったことは、変動地形学の専門家だったら考慮しないはずがない活断層を評価に入れてない、そして、ひと続きの活断層を三つに分断して評価しているというごまかしと、ねぎりで原発の耐震設計が

行われていることがわかったのです。なぜ活断層をねぎるのかという疑問は、本来の長さの活断層だと想定マグニチュードは7になり、三つに切るとマグニチュード6.5になる。耐震設計が安く済むという意図が働いていると理解できたそうです。

その上、電力会社が活断層の長さを直線構造に重点をおいて測定しているために、変動地形学とは相当違うところに活断層を判定しており、長さも位置も違ってきていることがわかったそうです。

活断層を認めたくない、確認できないものは否定するということ、変動地形学を無視した主張に、国の耐震安全審査に適合しているというバックチェックの結果も信じる事ができないと言われました。

島根原発、能登半島、柏崎周辺、敦賀半島と、次々に行った調査でも、電力会社の活断層評価は変動地形学の初歩的なものをわからずに結果をだしていると言いました。

会場から、日本中の原発を再調査する必要があると思われるが、どのくらいの作業量になるかという質問がありました。写真判読で起伏を読んで現地で確認する程度で済むそうです。専門家のすごさを感じました。巨大地震が来る前に、変動地形学の専門家による真の活断層評価が必要だと思った講演会でした。



Q先生と呼ばれている渡辺Manoさん。大の猫好き。東洋大webサイトより